

プフィッツナーとアイヒェンドルフ  
——二人のロマン主義者の出会い——

松原良輔



アイヒェンドルフの肖像

2026年1月20日《定期演奏会》において常任指揮者ヴァイグレの指揮でプフィッツナーのカンタータ〈ドイツ精神について〉を日本初演します。プフィッツナー作品への興味を深めていただくため全5回で実施している特集の第4回のテーマは、プフィッツナーとアイヒェンドルフです。

(読響事務局)

## はじめに

プフィッツナーは、今回演奏される〈ドイツ精神について〉を始めとする大規模な声楽曲や〈パレストリーナ〉などの音楽劇と並んで、(歌曲集を構成する各曲を1曲と数えると)約120曲にも及ぶ歌曲作品を残した。多くはピアノ伴奏による独唱曲だが、管弦楽伴奏付きの作品もある。歌曲創作の際に彼が選んだ詩の作者は、ペトラルカのようなイタリア・ルネサンスの文人から、ゲーテやハイネやメーリケといったドイツのいわゆる古典作家、さらにはデーメルのような同時代人にいたるまで、きわめて幅広い。その中でも、後期ロマン派を代表する文学者ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ

の詩による歌曲は20曲におよび、他を圧している。もちろん彼の詩が古今のドイツ歌曲の作曲家に愛されていることは、改めて指摘するまでもない事実であり、プフィッツナーもその流れを汲んでいるという説明で事足りるのかもしれない。ただ彼が生きた時代に、アイヒェンドルフの詩がドイツでどのように受けとめられていたかという点に着目すると、「ドイツ歌曲の伝統の継承」あるいは「最後のロマン派作曲家と最後のロマン派詩人の邂逅<sup>かいこう</sup>」といった図式に収まらない何かが見えてくる可能性もある。

## 詩人アイヒェンドルフのイメージ

まずアイヒェンドルフの生涯を簡単に紹介しよう。彼は1788年にシュレージエン地方(現ポーランド南西部)に生まれ、ハイデルベルクやベルリンで学んだ後、1813年から15年にかけて対ナポレオン戦争に義勇兵として参加、その後はプロイセン王国の公務員として働きながら、執筆活動にいそしんだ。没年は1857年で、プフィッツナーが生まれるより10年少々前である。

音楽愛好家にとっては主にシューマンやヴォルフらによる歌曲を通じて、詩人として親しまれているアイヒェンドルフだが、『のらくら者の生活から』などの物語作品や劇作品、文学史や文化財保護についての著作もあり、執筆活動の幅はかなり広い。また詩に限ってみても、さすらいの喜び、孤独と恋、森のさわやかさと魔力、そびえる山と古城といった、いかにもドイツ・ロマン派らしいテーマやモチーフで織り上げられた作品が有名だが、ロココ風の恋愛遊戯にほろ苦い風刺を織り交ぜたものや、時代状況の中で憂国の想いを歌った詩もある。

さて、プフィッツナーが歌曲に取り組んでいた19世紀末から1930年代にかけて、アイヒェンドルフはドイツでどのように受容されていたのだろうか？ 重要なのは、当時の彼が「ドイツ(人)らしさを体現する詩人」「ドイツの民のこころを歌う詩人」として幅広く人気を博していたことだ。その際に人々が思い描いた理想のドイツ人像は、さすらいを愛する夢想家だったり、神と祖国のために戦う敬虔<sup>けいけん</sup>で勇敢な英雄だったりと多様だった。それでも、これまでの研究が明らかにしているように、アイヒェンドルフの詩の独自の技法と、一部神話化された伝記的な事実が組み合わせあって、多様な階層や年齢層のドイツ人から思い入れたっぷりに愛されるという構図が成り立っていたのだ。文学史

家ヴィルヘルム・コッシュは、1921年にこのような受容状況を以下のように要約している。「ドイツ人の信仰と希望と愛、ドイツ的な心情、雄々しくまっすぐなドイツ人の誇り、自然と向き合うときのドイツ人の心からの歓び、純真さと憧れ」といった「ドイツ民族が昔から受け継いできた精神」がアイヒェンドルフの詩には映し出されている、と。

## もう一つの『ドイツ精神について』？

### ——第一次世界大戦中の管弦楽伴奏付き歌曲

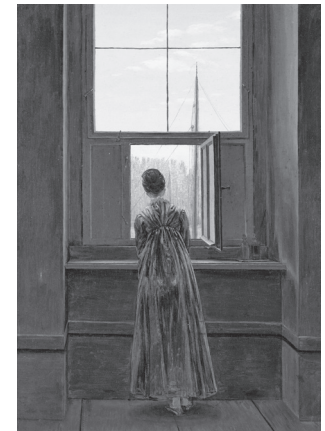
アイヒェンドルフの詩によるプフィッツナーの歌曲作品の中から、ここではまず、1915年に作曲された『2つのドイツの歌』を取り上げたい。この管弦楽伴奏付き歌曲は、アイヒェンドルフの「嘆き」と、彼と同じくシュレーゲン出身のアウグスト・コピシュによる「ラッパ手」を歌詞としている（演奏順では「嘆き」が2曲目だが、作曲されたのはこちらが先）。ここで付曲された「嘆き」では、ドイツがナポレオンによる支配に苦しんでいた時代状況を背景に、詩の語り手である「私」が、祖先や輝かしい過去を夢見つつ、神の加護下でよみがえるべき正しい世界のヴィジョンを思い描く。祖先との連帯の象徴として「父祖伝来の剣」が使われ、過去の栄光の例として「君侯の行い」に言及され、「苦難と困窮によって、硬い鋼のように鍛えられた種族」が正しい世界の支柱とされるなど、勇壮さと保守的な愛国心を明確に押し出した詩だと言えよう。

この詩に寄り添うプフィッツナーの音楽は、ホルンを中心とする夢想的な旋律で始まるが、やがて戦意をあおるように高揚していく。さらに忠国の兵士を主人公とする「ラッパ手」との抱き合わせによって、作品全体は「ドイツ愛国精神の宣言」という性格を色濃く帯びる。ここでは、熱狂的なナショナリストとしてのプフィッツナーが、アイヒェンドルフに理想の「ドイツ性の表現者」を見出していると言えそうだ。ただし上述したように、「アイヒェンドルフ＝最もドイツらしい詩人」という等式は、当時においては自明だったので、プフィッツナーがアイヒェンドルフ像をことさら歪めているわけでもない。さらに1915年という作曲年が、第一次世界大戦中だという事実も確認しておきたい。この戦争は精神面においても「総力戦」として、多くの芸術家の「祖国に奉仕したい」という意欲を鼓舞した。プフィッツナーがこの曲で示したドイツ人魂への熱狂的でやや外面的な賛美にも、このような「時局性の表れ」という側面があるのかもしれない。

## 作曲家と詩人を結ぶもう一本の糸

実はプフィッツナーが歌曲のために選んだアイヒェンドルフの詩の多くは、恋、孤独と憂愁、自然への愛や自然の魔力をテーマとしており、前節で触れたような時局性を帯びた詩が選ばれるケースはまれである。特に初期の作品では、シューマンの〈リーダークライス 作品39〉を思わせる叙情性と劇性の織り合わせが魅力的だ。もちろんプフィッツナーが生きた時代には、内面性や夢想性や自然への愛も「ドイツらしさ」の一端と見なされていたことは、意識しておく必要があるだろう。

とはいえ、より重要と思われるのは詩の選択から垣間見えるプフィッツナー独特の美意識である。たとえばシューマンの上記作品で選ばれている詩は、心のうちを歌うものであれ物語的内容を持つものであれ、比較的安定した語りの視点を持つ。そのため読み手は、詩が描き出す心情や世界にまっすぐに没入できる。それに対してプフィッツナーの選んだ詩においては、一種の「視点のずれ」が目立つ。たとえば作品9の第1曲「庭造り」では、実らぬ恋心を一心に歌い上げたと思ったのも束の間、失恋の痛手を隠して生きる詩の主人公は、「やがてわが身の墓を掘る」と嘯くのである。この詩句によって、主人公の恋愛感情をリアルタイムで共有していた読み手は、突然そこから引き離され、詩の世界に没入している自分を外から見るような感覚を味わう（ロマン派の画家C. D. フリードリヒが好んだ「風景と風景を見る人」を、鑑賞者が見る」構図を連想させる）。このような構造を持つ詩へのこだわりは、プフィッツナーをアイヒェンドルフと結びつける、もう一つの糸の存在を暗示するように感じられるのだ。ただそれを「近代性の意識」と呼ぶべきか、「時流からはずれているという自覚」と呼ぶべきかは、難しいところである。



フリードリヒ『窓辺に立つ女』

Profile 松原良輔 Ryosuke Matsubara

1964年生まれ。埼玉大学人文社会科学部（教養学部）教授。研究対象は19世紀を中心とする近代ドイツ語圏の文化・文学。論文に「アイヒェンドルフとドイツ国民記念碑」、翻訳にワグナー『ペートル・ヴェン』（共訳）、同『恋はご法度』、『リエントツィ』（いずれも対訳）などがある。